

# ペット防災：避難所でのペットの命を守るように ～動物用トリアージタグの制作および配布～

山本和弘（生命環境学部 アニマルサイエンス学科）

キーワード：ペット、防災、東日本大震災、動物用トリアージタグ、トリアージタグ

## 1. はじめに

日本の歴史を見てみると、度重なる災害に見舞われ、その時々において復興を繰り返してきた文化と言っても過言ではない。台風、大雨、大雪、洪水、火山の噴火などによる被害が毎年のようにどこかで起こり、人的被害だけではなく、経済的にも大きな損失を受けてきた。最近では、1995年の兵庫県南部地震（阪神淡路大震災）、2007年の中越沖地震、2011年の東日本大震災、2016年の熊本地震など、復興する人々の姿は記憶に新しい。このような災害のたびに災害弱者に含まれるペット飼育者がいることを忘れてはならない。

日本ペットフード協会の調査によると、全国の推計で犬は848万9千頭、猫は964万4千頭が飼育されている（ペットフード協会の統計2020）。また、東京都における犬の登録数は51万頭であり、23区内だけでも33万頭となっている（2019年東京都福祉保健局統計データ）。日本全体で犬は680万世帯、猫では550万世帯の家庭で飼育されており、全国の世帯数から計算すると、約20%（(680万+550万)/5740万）の家庭が犬もしくは猫と同居している。このように、ペットの飼育者は全体から見ると少数派となるが、もし災害が発生すると、ペット飼育者の被害も大きく、軽視することはできない。

南海トラフ地震や首都直下型地震が今後30年以内に起きる確率は70%と言われてすでに16年が経過することから、首都圏での大地震が足元に迫っており、こうしている今にも被災する可能性は極めて高い（首都直下型地震等による東京の被害想定 報告書2012）（首都直下地震対策検討ワーキンググループ最終報告2013）。このように危険度が増す中、ペットの飼育者であるため、さらに避難が困難となる事実は、これまで起こった過去における災害の検証でも明らかになってきた。カリフォルニアの豪雨災害時の調査（Heath, 2001）では、ペットがいない家庭と比較すると、避難行動をおこなうことができないリスクは、犬の飼育者は1.8倍、猫の飼育者は1.4倍となった。また、飼育頭数が増えると共に、リスクも有意に大きくなることが報告されている。よって、ペットを含めた防災、減災計画を立てておくことはペットだけでなくペット飼育者の命を守る意味でも極めて重要である。

帝京科学大学がある足立区には、2020年度に犬は25998頭登録されており、23区内では、世田谷区に続いて二番目に多い数である。この足立区において震度6強の首都直下型級の地震が起きた場合、区内の3万棟の家屋が瞬時に倒壊し、犬の登録数から推計すると5000頭以上が被災するという分析が行われた（著者 未発表データ）。また、猫は5500頭程度、区内に飼育されていると考えられるため、犬と猫だけで

1万頭以上の動物が、家屋の倒壊によって被災する。犬だけでも5000頭以上が行き場を失い（未発表データ）、足立区内にある122箇所の避難所に、人だけでなくペットと飼育者も一気に押し寄せることとなり、パニック状態となりうることは容易に想像できる。

この際、救助のために重要となるのがトリアージ（フランス語で「選別」という意味）である。人の救急医療現場では、多くの負傷者が一時期に集中した際、トリアージにより、危険度が高い人から優先的に治療が行われ、救急救命率が増加した。災害時だけでなく事故や火災の現場などにおいても用いられることも多く、人の病院ではトリアージを想定した上での救急医療体制をとっている。人においては、「トリアージタグ」という重症状態を分けるタグ（札）をつけて行う場合が多く、緑色は軽症者、黄色は多少治療が猶予できる者、赤色は直ちに治療が必要な患者、黒色は救命が不可能ですでに死亡している者とされており、一部を切り取って区分がひと目でわかるようにされている。

（人のトリアージタグを図1に示す）

今まで動物用のトリアージタグはほとんど制作されておらず、現実的にはトリアージを行うことは難しかった。そこで今回は、減災という観点からも、獣医師や動物看護師などが発災時に即時にトリアージを行うことができるように、「動物用トリアージタグ」を制作し、足立区および台東区に配布をおこなった。このことを通して、首都直下型地震などが起こり、多数の負傷動物が生じた際、効率的に救命することを目的とした。

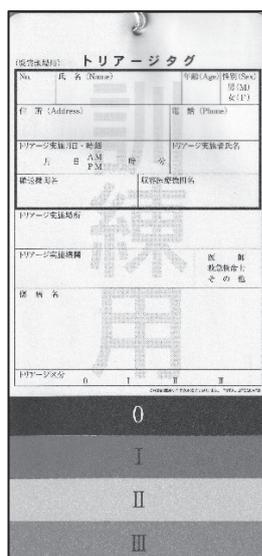


図1 人のトリアージタグ (110×230mm)

## これまでのペット防災の取り組み

2017年以降、著者らは、足立区保健所、足立区災害対策課、台東区保健所、地元のNPO法人あだち動物共生ネットワークなどの組織と協力し、地域のペット防災に取り組んできた。「ペット手帳」という、ペットのためのやさしい手引書を作成し、足立区、台東区の飼い主の方々に配布し、防災および災害に対する備えの重要性についての普及啓発活動に寄与してきた。今現在、災害が起きてでも使用できるように地域ごとの災害対策準備情報を提供した内容であった。中でも台東区では、登録されている犬、約5000軒を対象に、狂犬病予防接種に訪れたすべての飼い主に配布された。また、ペット防災アプリの開発も進められ、ペットの個体情報が記載できるだけでなく、GPSによる携帯電話の位置情報からペット同行避難が可能な避難所までの案内などがわかるような仕様となっている。このように、IT世代にはペット防災アプリを提供し、比較的高齢の方々には手に取って使用いただける「ペット手帳」を配布し、幅広い世代へのペット防災に取り組んできた。(地域連携研究2018, 2019, 2020)

## 2. 動物用トリアージタグの作成

### 2-1. 作成の背景

災害時に重要なのは「自助」「共助」「公助」であるが、首都直下型地震などの大規模災害になると「自助」には限界があり、災害時に動物が負傷した場合、動物病院自体も被災するため獣医療へのアクセスが困難となる。おそらく、被災者は行き場を失い、負傷したペットともに避難所に訪れて来るものとされる。しかしながら、そこには人命優先の「公助」が存在し、どうしてもペットの治療と救命は後回しになりかねない。避難所に訪れた被災家族にとって家族同様のペットの命を救うことは飼い主の命を救うことにつながることは間違いない。大規模地震が発生した際、足立区内では1箇所の避難所に、被災動物が最大150頭以上の犬が避難するという試算もある(著者未発表データ)。1箇所に負傷動物が集中した際の備えとしてトリアージタグを制作した。台東区では毎年秋に、ペット防災トリアージ訓練が行われ、今回制作したトリアージタグを使用して訓練が行われる予定である。

### 2-2. 動物用トリアージタグのコンセプト

人用トリアージタグは、通常110×230mmの縦長の大きな形状で、トリアージが行われた際は右手首関節部に付ける。今回制作した動物用トリアージタグは60×100mmと人用に比べるとかなり小さく作成した。(図2) なぜなら、動物に直接付けることができないので、避難所に持ち込まれたキャリーケースやケージにタグを括り付けることとなり、その際、タグが大きいと動物が誤嚥する確率が高くなり、避難所でさらに異物誤嚥治療が必要になってしまうからである。それを避けるためにもあえて小さいサイズに設計し、さらに容易にははずれないよう上1箇所の固定でなく中央部にも穴を開け2箇所で固定し、被災動物への誤嚥も防止できるよう考慮した。また、屋外にケージを置いて動物たちの避難を行う場合や、暴風雨時の避難所間の移動などを考慮して、なるべく防水性のある素材とした。トリアージを示す4色の間にはミシン目を入れ、容易にトリアージを行うことができるように切り取りやすく配慮した。記載内容はできるだけシンプルな情報のみとし、基本的には動物の重症度のみを判断できるようにした。

図2 今回作成した動物用トリアージタグ (60×110mm)

### 2-3. トリアージタグの配布

トリアージは合計1万2千枚、足立区獣医師会および台東区保健所に配布した(写真1、写真2)。足立区では、発災時、足立区獣医師会によりペットのための災害対策本部が設置され、避難所に獣医師や動物看護師が配置され、そこで動物用トリアージタグを使用する予定となっている。



写真1 足立区獣医師会への配布



写真2 台東区保健所への配布

## 2-4. トリアージタグの課題

災害時に動物のトリアージを行うには、必ず重症度を判断できる動物医療従事者が必要となる。おそらく大規模災害時には足立区内および近隣地域の動物病院、そして獣医師自身も被災していると予測されるため、災害時に必要な専門家をすべての避難所に配置することは難しい。そのため、被災していない地域からの応援要請が必須である。まずは、区内の臨床獣医師が救援にあたり、その後 VMAT\* (Veterinary Medical Assistance Team: 災害派遣獣医療チーム) などから派遣された獣医師が日を追うごとに動物救護センターに配置されることとなる。とくに地震災害は予測がつかず、獣医療従事者の即時の判断が動物の生死を分ける。そのためには、普段から VMAT や地域の動物病院との連携を行い、シミュレーションしておくことが減災につながると考えられる。

## 2-5. コロナ禍での江東5区における災害時の同行避難

2020年の新型コロナウイルス感染症蔓延防止策により避難所の運営方法も大きく変化した。避難所も感染予防が必要となり、以前よりも少ない人数しか収容できない (Ishiwatari 2020, Sakamoto 2020)。東京都福祉保健局のガイドラインによると (2020.6) 感染防止対策として、避難スペースのゾーニング、避難者同士の距離の詳細が示されたが、やはり人命が第一であるためコロナ禍での動物に対する避難対策はなかなか進まないのが現状である。とくに江東5区と言われている、江戸川区、江東区、墨田区、葛飾区、足立区で大規模水害が生じた場合、250万人 (産経新聞 2019年11月19日) が避難する必要があるが、この地域の避難所の推定収容人数は20万人分しか確保できていない。それ故に、ペットを連れて避難所に向かう際は、収容可能かどうか事前に情報を得てから行動することが望ましい。ペットと同行避難すること、およびさらにコロナ禍により避難所での新型コロナウイルス感染の可能性が高まるとなると災害時での動物飼育者のリスクは増すばかりである。

今回、動物用のトリアージタグを制作し、試験的に足立区および台東区に配布をした。現実として、災害時の動物医療システムはまだまだ発展途上にある。しかし、このタグを獣医療者関係者や災害対策を行う方々に手にとっていただき、いつか発災した際に、どのように動物の命と人命の救助を行うのかのイメージを持つ機会となることを切望する。間近に迫っている災害に備えることにより、一人の命、一頭の命を大切にするためには今日何ができるかを考えてゆきたい。

\*VMATとは、災害派遣獣医療チームであり、獣医師動物看護師、動物トレーナー、トリマーなど1チーム4～5名で構成され、大規模災害や多くの傷病動物が発生した事故などの現場に、急性期 (おおむね48時間以内) に活動できる機動性を持った、専門的な訓練を受けた獣医療チームのこと (大阪府獣医師会HPより引用)

## 参考文献

- 1) 犬の登録頭数・狂犬病予防注射頭数 (東京都内区市町村別) 東京都福祉保健局統計 (2019)
- 2) 全国犬猫飼育実態調査日本ペットフード協会 (2020)
- 3) 首都直下型地震等による東京の被害想定 報告書 東京都防災会議 (2012)
- 4) 大規模地震発生時の犬の避難頭数の予測：足立区におけるペット飼育者の災害時リスク分析 (著者 未発表データ)
- 5) 犬の登録頭数・狂犬病予防注射頭数 (東京都内区市町村別) 東京都福祉保健局統計 (2019)
- 6) 首都直下地震対策検討ワーキンググループ最終報告 内閣府 中央防災会議 平成25年12月 (2013)
- 7) Heath, S. E., Kass, P. H., Beck, A. M., & Glickman, L. T. Human and pet-related risk factors for household evacuation failure during a natural disaster. *American journal of epidemiology*, 153(7): 659-665. (2001)
- 8) Ishiwatari, M., Koike, T., Hiroki, K., Toda, T., & Katsube, T. Managing disasters amid COVID-19 pandemic: approaches of response to flood disasters. *Progress in Disaster Science*, 6, 100096. (2020).
- 9) Sakamoto, M., Sasaki, D., Ono, Y., Makino, Y., & Kodama, E. N. (2020). Implementation of evacuation measures during natural disasters under conditions of the novel coronavirus (COVID-19) pandemic based on a review of previous responses to complex disasters in Japan. *Progress in Disaster Science*, 100127.
- 10) 都心0メートル250万人の命は 広域避難 別れた判断 2019年11月9日 産経新聞掲載記事 (2019)
- 11) 大切なペットを災害から守るための「ペット手帳」の制作と配布：足立区行政、地元NPO法人との連携 2:25-27 地域連携研究 帝京科学大学地域連携推進センター年報 (2018)
- 12) ペット防災：区民一人ひとりが「自分の命そしてペットの命」を守るように～ペット手帳の改定、およびペット防災アプリの開発～ 3:15-18 地域連携研究 帝京科学大学地域連携推進センター年報 (2019)
- 13) ペット防災：100年に一度の災害はすぐそこに「自分の命そしてペットの命」を守るように：ペット手帳の配布、およびペット防災アプリの開発 4:53-56 地域連携研究 帝京科学大学地域連携推進センター年報 (2020)